連載随想第二十回

山草の色

白川渥
え・中西勝

「誰だ、苔を踏みつけたのは？」

ある朝、主（あるじ）が庭に出て呶鳴った。春が来て、ようやく色ずいて来た玄関先の苔が、一ところ、踏みにじられている。

たしかに、ハイヒールの跡だ。

「×子さんたちですわ、きっと。……昨日そこでお喋りしていましたから」

家の中から、家人が応える。

「チェッ、しょうのねェ娘っ子だ」

これから外出しようと言う矢先だったが、主はボヤキながら、さっそく苔の修理をはじめる。×子さんたちとは、親戚の娘で、洋裁学校の生徒。何れも年頃のおしゃれ盛り。服装の流行色についてはひどく敏感だが、脚下の苔の色などには、トンと無関心のようである。

「まったくなっちゃいねェ。顔ばかり塗りたくって」

「そりゃ、無理ありませんわ。若い人たちですもの、そんな苔なんぞに」

「……」

主は無言で、小さく溜息をついた。そう言えば苦いじりなど老人臭い。こんな趣味にいつからとりつかれたか、わが年齢が、ふっと振り返えられる。

物置から、山土の箱とシャベルを取り出して、ていねいに破損箇所を修理しているところへ、頼んで置いたタクシイが迎えに来た。

「これ、何て種類だっか？」

中年の運転手、興ありげに、かがみ込んで見物する。

「なに、普通の山苔サ」

「よくつきましたなァ」

「いや、この通り、すっかり剝げましてねェ。さんざん苦労した残骸です。まったく、こいつには手古ずりましたよ。ハハハ……」

主は苦がい自嘲を放った。苔の庭を作ってやろ

うと発心したのは、戦後間もない頃だったから、もうかれこれ十五年になる。その間いくたびか裏の山へ苔取りに行った。庭師の知恵をかりて、胞子も蒔いてみた。京都の苔寺へ照会したこともある。苔寺からは、簡単な刷り物の返事が来た。境内の苔は独自の土質、湿度と大気の流通によるもので、よそさまのことはわかりませぬと言うような素っ気ない印刷物。わが経験に照らして、たしかにその通りのようであった。育たないところには、いくら水をくれても日覆いをしても、ダメなのである。一説には、神戸と言う土地は汐風のせいで育たないとも言う。ところが、わが家の裏庭の方には、いつの間にか自然の苔が青々とついてしまった。こうなれば、手をつくしてもつくすだけムダである。苔は人間嫌いの植物である。――やっとそれだけ覚って、ここ数年は放ったらかしのままなんだが。……

「旦那、シダは簡単ですよ」

「え、シダ？」

「はァ、山シダです。うちは放ったらかしですが、あれも若葉の噴くころは見事なもんだす」

「あんた、シダをやっておられるの？」

「はァ、空襲中、六甲の小屋へ逃げ込んでおりましてン……」

その小屋の軒から移植した山羊歯が、いま庭いっぱいに鶯色の若葉をひろげているのだと言う。この運転手君、なかなかに話せる。車の中で、主はしげしげとその横顔をのぞいた。

「わて、戦後五年も山の小屋で暮らしましてン。又そろそろ山へ帰りとうなりましたわ」

「どの辺です」

「あの団地のちいと上の方で。……」

「ホウ、いいところだね」

「はァ、こう街が騒々しゅうなると、又あの辺がちょうどよろしゅうなりましたわ。なに、猫の額ほどの土地だすけどナ」

運転手君の指さすあたりの山へ、戦後、ちょくちょく散歩の足を伸ばしたことがある。山裾の尾根を越え、谷を渡って上ってゆくと、林中に点々と小屋があり、耕地があった。山羊が啼き犬が吠え、麦が熟れ、除虫菊の花が咲いていた。すぐ眼下に港都のビル街を見下ろしながら、そこはまるで桃源境の閑かさであった。山の人々は、山窩などではない。ボロボロの衣服をまとい、日に焼けた黒い顔をしているが、いずれ疎開したまま居ついた人たちであろう。その風貌には、どこかまだ昨日までの市民の名残りがあった。時には、何となくインテリめいた鋭い眼に出合ったこともある戦争はとっくに終っている。もうそろそろ下界に下りて来てもよさそうなもの。なぜこの人たちはいつまでも不自由な山の生活と孤独に堪えているのか？　応仁の乱後、山野叢林に身を潜めたあのインテリ世捨人のことなどを思い出したものである。つまり、食や住と言う形而下の理由からだけではなく、戦争による無常観と言ったようなものが、彼らをいつまでも山に足止めしているのではなかろうか？……当時、そんな思いも抱いたものだったが、あれから時代は一変して、その山の土地が恰好な住宅地になろうとしている。学校、病院はもとより、羊歯や苔を愛さぬ市民までも、騒音とスモッグの街から、山にズラカろうとしている。住宅地は山へ山へ――二十年後に、再びこんな疎開騒ぎが起きようとは。……

（作家）

連載随想第八回

牧歌

阪本勝
え・小松益喜

わたしの子供のころ、ふるさと尼崎の海岸は美しい砂浜だった。波打ちぎわまで続く砂浜には、いちめんに西瓜やさつま芋がうわっていて、畑のつきるあたりからすぐ渚となった。ゆるやかな波の折りかえすあたりに、桃色や紫の貝殻がたくさん落ちていた。それを拾いながら夕日の落ちるころまで遊びほうけていた少年の日がなつかしい。

今は物々しい防潮堤の外になってしまい、大阪湾の怒濤が終日打ち砕けているが、昔は静かな磯辺で、少年たちの天国だった。たのしみの一つに〝カレイ踏み〟というのがあった。籠を腰にぶらさげて遠浅の磯をあちこち歩きまわると、足のうらの土踏まずのあたりに、磯ざかなの小さなカレイがピクピク触れる。それを手でとって籠に入れあかず磯の漂泊を続けていると、籠はやがていっぱいになる。

「待て貝捕り」というのも思い出が深い。潮の引いた砂地を小さなシャベルで浅く掘ると、シガレットの口ぐらいの小さな楕円型の穴があちこちにあいている。これが〝待て貝〟のいる穴で、そこに一つまみの塩を入れると、穴の底にかくれている貝はあわてて半身を穴の外にあらわす。それをすばやくつかまえようとすると、貝はさっとまた穴の中にかくれてしまう。「待て！」と少年たちはさけんでくやしがるが、こうなるともうこんりんざい相手は姿を現わさない。ほんとうにシャクなやつだった。

砂地をすこし掘ると、ハマグリなどは花咲爺さんの小判のように、ザクザクと出てきた。わたしの乳母が釣舟屋をやっていたので、ときおり頼んで小舟を出してもらい、ハゼ釣りをしたが、嘘のように釣れた。イナやボラが河口の水面に躍りあがり、空気銃でうてそうだった。河口近くの石垣の穴に針餌をさきにつけた竹をさし入れると、待ってましたとばかりウナギが食いついて、引き出すのにフウフウいった。小坊主と大ウナギとのたたかいは、オトナとクジラとの決戦より骨がおれた。

いとのどかな眺めであった。たくさんの釣舟の間を縫うて、物売り舟が往き来し、おでんや飲みものを売りあるく。これを「くらわんか舟」といって、この浜の名物だった。一度父につれられて釣舟で出かけたが、近くの畑でとれた西瓜がくらわんか舟に積みこんであるのを父は買ってくれた海水でよく冷えた西瓜のあのときの味が忘れられない。

いつの夏だったか、大阪港で打ちあげ花火大会とやらが催おされた。花火のファンだった父は私をつれて沖合はるか漕ぎ出でた。夏の日はすでに西の方に落ち、星が輝やき出した。やがて大阪港とおぼしきあたりの空に美しい花火の打ちあげられるのが見えた。父は舟ばたにもたれながら、じっとその方を眺め入っていた。よほど花火が好きだったらしく、つぎからつぎと空に咲く花を、感に堪えぬ面持ちで飽かず打ち眺めた。私はこのときの父の表情を忘れることができない。

今でこそ工都の悪水の犠牲になり、さかな一ぴきいない尼崎の浜だけれども、こんな牧歌的なころもあったのである。なにしろ少年の小さな足でカレイが踏めたのだから、磯ざかながいかに豊富であったか、今では想像もできないだろう。

浜ばかりでなく、田園にも豊かな牧歌があった田にはイナゴ、タニシなどがふんだんにいた。トンボや蝶が少年たちをどんなに喜こばせたことか夏の夕ぐれ赤トンボはスイスイと空に舞い、カナカナゼミは一日のわかれをつげた。

阪本の家に永年勤めていた〝およし〟という女中がいた。近所の田でわたしがとってくるイナゴやタニシなどを料理してはたべさせてくれた。わたしは妙にイナゴが好きで、それをたくさんとってくると、およしはまずそれを醤油で煮つめ、さらにほうらくで炒って、黒こげになったのをわたしにご馳走してくれた。わたしはポリポリ音をたててむさぼりたべた。阪本病院の裏の小川にはドジョウが湧くほどいた。およしはそれをザルですくってきては柳川鍋をつくってくれた。妙に料理の上手な女であった。わたしは六つか七つになっていたと思う。

ああしかし、悪水、農薬という暴力は浜からも田園からも牧歌を抹殺してしまった。磯ざかなは竜宮城に去り、イナゴ、トンボ、ホタルどもは、少年たちに愛惜のわかれをつげて雲烟のかなたに消えた。

文明とは暴力にほかならない。そこでは少年時代のたのしい夢をむすぶことのできないあわれな奇型人ができあがる。その点わたしはしあわせだったと思う。人生の秋に立って過ぎ去った春の思い出にふけれるのは、こよなき幸福であるし、人間の権利でもある。

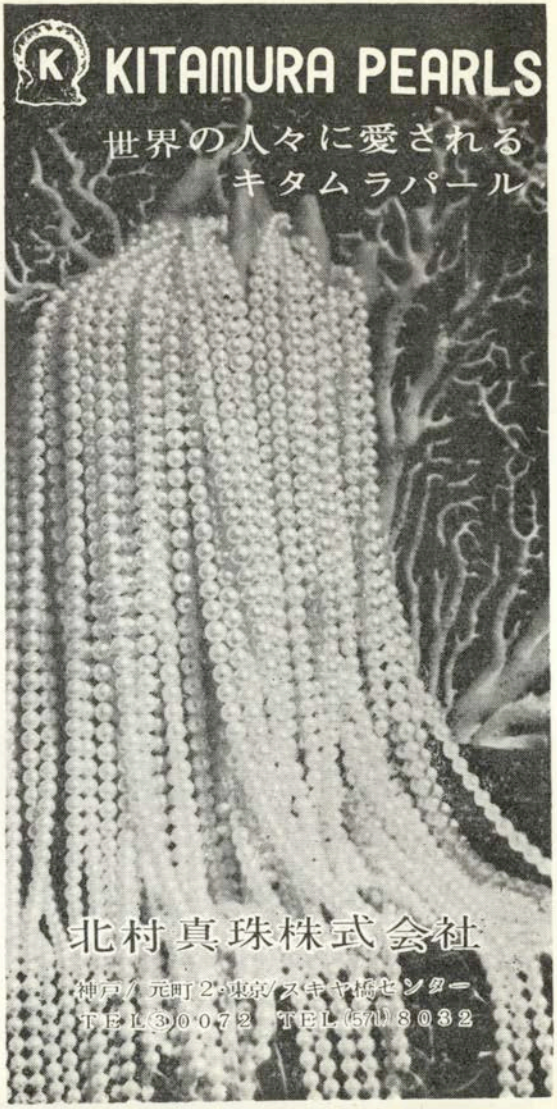
いま書架から白秋の「思い出」をとりだし、巻を開く。巻頭の一節—

「時は過ぎた。そうして温かい苅麦のほめきに赤い首の螢に、或は青いとんぼの眼に、黒猫の美しい毛色に、いわれなき不思議の愛着をよせた私の幼年時代も何時の間にか慕わしい《思い出》の哀観となってゆく」

わたしもまた牧歌の絶えた荒涼なる世界から、慕わしい思い出の哀歓となってゆく少年のころをしばし陶然としのびたいのだ。

（随筆家）

世界中の人からほめられた
日本の誇り　神戸のほまれ
マロングラッセは
ヒロタの銘菓
元町通三丁目　TEL③二三四〇番



呉服・洋装
みよしや
神戸 大丸前
電話神戸(3)三三八八～九番
大阪店 阪神百貨店三階
電話 大阪(361)五五四八番
姫路店 やまとやしき百貨店三階
電話 姫路㉓一二二一番
衣裳部 三宮町三丁目柳筋
電話 ③五一六五番

花の季節に
フランスの味
ゴーフル
GETSU
＊小型のプチゴーフルもあります
神戸 風月堂
元町3丁目 TEL③ 695・696

□神戸っ子放談□

地域開発における神戸の立場

小野一夫
日本香料薬品KK社長
神戸経済同友会代表幹事

神戸の問題は水と道路

「私はね、京都で生まれたんですが、住いはずっと神戸なんですよ。親父が今の会社を創ったもんで、その後は阪神間に住んでた訳なんです。ですからもう四十年になりますが、もの心つく時から神戸にいたことになりますね。まあ神戸っ子としても恥かしくないと思ってますよ（笑）戦後親孝行のつもりでこの会社へ来たんですが二十三年の十月に親父嘉七が死んでからは専ら社業に専念してる訳です。この会社は正式には日本香料薬品というように、化粧品、石けん、食品、歯磨、口紅などの香料や、テレピンという一種の植物油を作ってるんですが製品が消費者の皆さんに直結するものではないし、同業の方も少いうえにあまりPRもやらない田舎くさい会社なんですよ（笑）

ところで本論の放談ですが、私も神戸っ子の一人としていわせてもらうならば、神戸で一番大きな問題は道路と水だと思うんです。道路の問題ですが、現在すでに飽和状態に近ずいている。しかしこれに対して何等積極的な手が打たれていないんですね。これは官庁なんかの統計のとり方にも問題があると思うんです。神戸はご承知のように世界有数の貿易港を持っている。従って京都や大阪と違った特殊性があるんです。最近では貨物の輸送は鉄道よりもトラックに頼るようになってきていますが、港への貨物の出入りも大半がトラックなんです。それを統計上では神戸へ発着する車が何%、通過する車が何%と割り切ってしまっている。しかし港が市から離れておれば、神戸を通過する車は非常な数になるんですよですから神戸の道路問題を考える時には、港へ往来する車を頭に入れて考えて欲しいと思いますね。特にこれからは播州工業地帯や瀬戸内経済圏の発展によって、神戸を通過する車は年々多くなっていくんですからね。

それに水の問題ですが、近畿地方はなにかというと淀川の水を頼りにしている。淀川ということは琵琶湖の水なんですが、これが年々水がへって来て水争いになりかねない状態なんです。その上大阪周辺の衛生都市が発展してくると、神戸の端まで将来も淀川の水が引けるとは限らない。ですから今のうちに加古川や揖保川を利用することを考えないと手遅れになりますよ。住宅を作るよりも先に、水の問題をまず考えなければならないと思うんです。現状では神戸の場合工業用水までは手がまわらんのじゃないかと思いますね。ですから、神戸という所はこれ以上工場をふやさず。人口の急激な増加を抑える方がいいんじゃないでしょうか。今のように神戸が淀川の水に頼っているようでは工業地帯の造成も考えものだと思いますね。」

六甲山のトンネルは賛成

「それから、これは道路に関係してくるんですが、私は六甲山にトンネルをぶち抜くことは、非常にいいことだと思うんです。神戸を発展させるためには、六甲山をけずるだけでなく、三本でも四本でも六甲へ穴をあけたらいいと思うんです。トンネルによって六甲の裏側が本当の神戸市になる。現在では市域に入っていても、交通面では市とは言えませんよ。ですから、早く六甲へトンネルを数多く作るというのが神戸の大きな問題でしょう。それによって、神戸の住宅問題も解消しますし、港から直線的に六甲の裏側へ道路をつけ、ここをターミナルにして東西へ走るようにすれば、市街地へ車が集中することもなくなるんじゃないかと思います。なんせ神戸は海と山とがひっついているから今後は山の裏側を利用することを考えなければ、これ以上の発展は望めませんよ。

六甲にトンネルをあけると六甲の自然美、六甲の緑が損われるという人もいますが、だいたい神戸の町は、六甲に緑があるため町の中に緑が非常に少いと思うんです

それで私思うんですが、市内にもう少し緑を育てるということをやらないかんと思います。緑したたる公園もなければ、町の中には緑の美しさを見出すこともできないその点では地方都市なんか実にうらやましいですよ。町のいたるところに緑がある。社会的な遺産としても下から盛り上るような緑を育てる運動というものをやらなければいかんと思いますね。

それともう一つは文化施設。先日富山へ行ってびっくりしたんですが、富山市の体育会館というのが実に立派な建物なんです。王子体育館なんかくらべものになりませんよ。地方都市へ行きますと公共施設に立派なものがありますが、その点神戸は文化的にお粗末ですね。立派なのができたなと思ってると私立学校なんです（笑）もう少し文化面でも力を入れて、庶民に解放できる施設を作って欲しいと思いますね。施設があれば人は自然に集ってくるんですから。市民に熱がないという前に、まづいれものを作らねば駄目ですよ。市民に熱がない訳じゃない。阪神間ほど営利会社による施設の多いところはないんですよ。それがみな繁盛しているんですからね。ただ残念なことに、これはみなコマーシャルですわ」（笑）

地域開発と神戸の役割

「どうも神戸の悪口ばかり言うようですが、神戸というところは、今後非常に重要な地位を占めるようになると思うんです。というのは、地域開発における神戸の立場ということなんですが、最近、首都圏整備法や近畿圏整備法とともに、各地方で地域開発という問題が盛んに論じられるようになってきました。ところが、この地域開発というものの考え方が、東京や大阪、あるいは地方でそれぞれに違うんです。地方に行くほど地域に対する感覚が次第に狭くなってくるんです。さらに開発ということを考える場合にはどうしてもその土地を中心に考えやすいんですね。そこへもってきて地域開発の場合、これまでは東西問題として考えられていたんですが、最近では南北問題というのが喧ましく言われている。この両者が入り混って広がってくると瀬戸内経済圏というものが出てくる訳です。この東西問題、南北問題が因になり果になって、近畿圏と瀬戸内経済圏とがどのように結びつくかということが、これからの地域開発の大きな問題になってくると思うんです。そうなると大阪の考えと地方の考えには相当な差があるので、なかなか一致しない。しかし、神戸というよりは兵庫県の場合、西日本的な広い感覚と、山陰地方を持つ関係から地方の狭い感覚とを兼ね備えているため、西日本の地域開発について大阪の立場も一地方の立場とともに理解でき、両者の融和をはかることも出来るのではないかと思うんです。

兵庫を代表するのは神戸ですから、そういうところに神戸の今後の役割があり、存在価値もあるんじゃないかと考えますね。」

経済界も国際性を持とう

「最後に今後の日本経済についても一寸触れたいんですが、開放経済となって、日本が世界の仲間入りしますね。そうすると、世界経済の中で日本はどういう役割を果して行くべきか、また日本がいかに国際性と調和した日本の行き方を見出していくかということが、経済界の大きな目標なんです。私の所属している同友会でも、目下この問題についていろいろ考えている訳なんです。

しかし私は国際性との調和、国際感覚の向上ということも大切だけども、日本的なものにもいいものがあると思うんです。西洋偏重になってしまってはいけない。それを恥かしがるような劣等意識はすてて、いい所はいいんだと世界に誇示できるようにならねばいかん。それも一つの国際感覚なんですよ。日本は西欧諸国とは経済慣行を異にする国であるという考えは取り除くようにしなければならないと思います。

また資本の蓄積という問題でも、自己資本と他人資本とのアンバランス、つまり自分で儲けた金を使うよりも銀行などから借りた金の方が多くなっているんです。これは技術革新の結果であって、新らしい技術で新らしい製品を生み出すために新らしい機械と新らしい工場が必要になり、このため大きな設備投資をしなければならない。そのためには戦後の企業は銀行からお金を借りて設備を新らしくしたので借金が非常に多いんですね。これが開放経済となって国家の保護がなくなった現在、借金が多いとどうしても企業の力が弱くなる、このためどのようにして自分の資本をたくわえていくかということが問題なんです。いわゆる社会の富ですね。この富のバランスをどうやって保っていくかということについて、そろそろ決着をつけなければならない。というのが今の経済界の一番大きな問題じゃないかと思うんです。」

写真は小野一夫日本香料薬品KK社長

経済ポケット ジャーナル

工業地変じて商業地へ

神戸市がコンベヤトンネルや河底道路、はては海上ダンプと奇手妙手で埋立工事を行っている東部臨海工業地帯造成は、当初の工業地帯の目算が外れ、商業流通センターに変るようだ。

現在工事が進められている東部第三工区は、四十一年に完成するが、ここに進出する予定であった川崎重工や三菱電機など大手会社が軒なみに辞退し、中小企業もこれに同調して未だ進出会社が決まらない。

市当局では、このため当初の計画を変更し、雑貨、繊維、野菜果実を中心とした専門の貿易市場を作り、港の大商業流通センターとして神戸港に直結させようと基本構想をまとめた。

経済情勢の変化に加えて坪当り三万八千円という高値の土地だけに、構想はとも角、商業流通センターとしても果して成り立つかどうか、土地造成の将来が注目されている。

レジオンドヌール勲章をうけた沢山汽船社長

神戸経済界でも豊かな識見の持主として知られる沢山汽船社長の沢山昇吉氏(74)が十七日、東京・麻布のフランス大使館でデヌリ駐日大使から名誉あるレジオンドヌール勲章を贈られた。沢山社長はフランスの長崎駐在名誉領事を兼ねており多年にわたる日仏親善が認められ、こんどの受章となったわけ。同氏は「特にフランスに貢献したわけではないが……」とけんそんしているが、沢山家とフランスとの関係は浅くない。貴族議員もつとめた厳父の故精太郎氏はフランスの留学生を世話したり、フランス東洋艦隊の長崎港への入港を誘ったりというわけで、大いに民間外交に力をつくした。このため精太郎氏も同じ勲章を受けており親子二代にわたる栄誉である。

沢山社長

商店街に地下駐車場

神戸市は商業活動が全国的にみても水準が高いが、まだまだ欠陥も少なくない。最大の難点は代表的なショッピングセンターである元町、三宮センター街にも駐車場らしい駐車場がないことだ。これまでの商店街はターミナルに直結していればよかったが、これからのマイカー族時代には駐車場がなくては大きな顔はできないといえよう。そこで元町五丁目の野網敏一氏(ナルセ運動具店)などは神戸高速地下鉄道が元町を通過するさい、地下鉄上に地下駐車場(約千台収容)を設けてもらいたいと神戸市会に働らきかけている。いま元町五丁目はモデル商店街づくりのプランメーキングに精出しているが、市内の他地区に先がけて大規模な地下駐車場ができれば、いまはちょっとくすんだ感じの同地区も大いに栄えることになるだろう。

金井経済外交ハッスル!

原口神戸市長の訪米中、米経済使節団の来神などこのところミナト神戸をめぐる国際交流は非常に盛んだが、こんどは金井県知事が夫人同伴で四月下旬に一カ月の予定で訪米する。渡米の目的は日米知事会議への出席だが、播磨工業地帯整備のための外資導入問題も大きなねらいとなっている。地元財界人はもちろん、阪神間在住の大阪財界人、米国のモーリス社長などと意欲的な接触をしている金井さんは「IMF八条国移行などわが国は開放経済の時代に入ったが兵庫県も立ち遅れてはならない。しかし工業整備特別地域の問題にしても兵庫県はいつも最後にはなっても立ち遅れてはいない。外資導入もこれからは難しくなろうが、本県ははいりますよ。まあ遅くても着実に進んでますからね」と自信たっぷり。金井経済外交に大いに期待しよう。

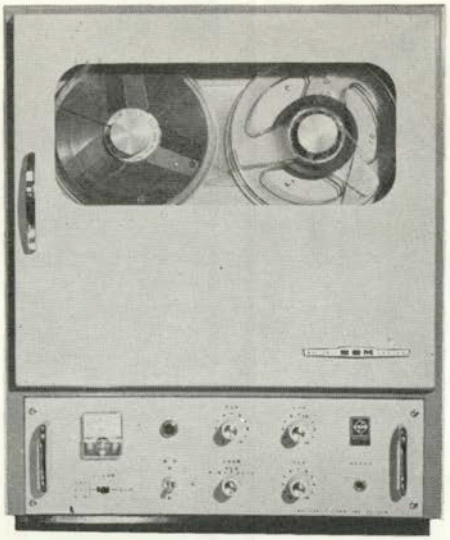
造船所にもムード音楽

ムードばやりの昨今、お堅いことで知られている造船所にムード音楽が登場。

これを採用したのは市内の川崎重工業、同社の造船設計部にズラリとスピーカーを並べ、軽音楽を流している。これは最近バックグラウンドミュージックとして注目を集めているもので、銀行や商社の一部では採用しているところもあるが、生産会社で採用したのは珍らしいケースと、職場の内外で話題となっている。

同社では毎日午後、職場の気分をやわらげ、生産能率の向上にと、耳ざわりにならない程度の低音で流しているが、若い設計マンからはお色気の少い職場にはもってこいと大好評。

ナショナルBGM
演奏装置



あなたの企業の繁栄をお約束するＢＧＭ

□工場では、騒音をカバーして能率を高め健康を守ります
□事務所ではふんい気を柔げ頭脳を軽くさせ仕事への集中力持続力をもたらします
□銀行、ホテル、デパート・商店、病院などにＢＧＭは絶対的な効果があり好評です

□ＢＧＭは大きな利益をもたらします。欧米では20年も前から各企業に取入れられ、わが国でも急速に普及しています
□ナショナルＢＧＭ演奏装置は豊富な経験と最高の音響技術が生んだ理想的な装置です

松下通信工業

■ＢＧＭの設置のご相談は神戸ナショナル製品販売Ｋ・Ｋ　ＴＥＬ代表（23）6201

北欧の銘菓

幣社の登録商標

□ピラミッドケーキ
□バウムクウヘン
□クッキー
□ムンデット
□シモン

ユーハイム
コンフェクト

本社・工場　神戸熊内町1（市立美術館東隣）
熊内店　TEL. 22－2336・1164・1165
三宮店　神戸三宮生田筋（階上喫茶室）
TEL. 3－7343・0156・4314

O-SHIBATA
柴田音吉洋服店

神戸・元町通4丁目　神戸 4－0693
大阪・高麗橋2丁目　大阪 231－2106

わたしは編集長

(1)

西村まさ

今月の編集は西村まささんにお願いしました。西村さんは日本の婦人ゴルファーの草分けで、六甲山の神戸ゴルフクラブにはレディースで活躍された記録が残されています。一九二五年から連続五年間一九二九年までレディース・チャンピオンとしてミセス・西村の名前が刻まれています。いまも広野、時には芦屋のゴルフ場で子息の雅司氏などとクラブを振っていらっしゃいます。笹部さんの奥さんとはゴルフ友達、古田さんは東京府立第三高女(現在の都立駒場高校)の同窓。秋保さんとは茶友で最近すすめられて西村さんも絵筆をとっていらっしゃいます

■インタビュー■

桜は日本人の心の木

笹部新太郎

(植物研究家)

伝統のある観賞植物を大切にしよう

「私は、日本人の心の中に残っているものは桜だと思っていた。このままでは桜は滅亡を待つだけだと考えて、大阪の学士クラブで〝桜への送辞〟と題して語ったのが、昭和13年の時なんですよ。それ以来桜は滅亡の一途をたどって、もうどうにもならない滅びようです。

日本人の心の木が滅びても一向平気なんだよ、日本は不思議な国になったものだと思いますね。

元来、日本人の木をいじる技術は世界に比類のないもので、最高の技術と観賞眼を誇っていたものだが、現在ほど観賞に対する眼が落ち技術が低下したのは、歴史はじまって以来でしょう。戦後はまた空前の暗黒時代で、磨き抜かれて来た、日本の観賞植物は殆ど姿を消すようなことになってしまった、全く眼を覆いたくなるような惨状と言うよりほかはないだろう。

例えば、神戸の異人館などに植えられた植物は、いわば、小松益喜、小出楢重などが描いた異国趣味として外

国から来た植物が育っていると言う楽しさがあったが、最近の高級住宅には、昔は悪木とさえ呼ばれた木や、この異国植物を誇らしげに植えているでしょう。どうにもあきれ返ったことですよ。」

植えただけでは樹は育たない

「陽気がよくなってくると、緑化運動とか、花いっぱい運動とかいって、一時的に騒ぐ向きもあるが、またその運動の内容と言えば、誠にみすぼらしい。樹を植えて緑化運動だと言うのだ。樹は植えただけでは駄目なんだ。育てなければね。樹が大きくなれば、その保護は幾何級数的に大きくなって来る。〝土壌〟を考え〝水の引き具合〟や〝空気の状態〟など充分に観察してから樹を植えなくては育たない訳だ。それを勝手に植えて〝やった、やった〟と言って喜んでいるのだから、無知ですね。いい加減に植えられると、その負担はすごく大きくなるんだから、逆に借金を背負されるようなものですよ。六甲山系の松が松喰蟲にやられ始めた頃、「朝日新聞」に書いたことがあるんだけど、兵庫県も神戸市も何んの返事もないし、屁のようなものだ。

阪急や国鉄には、学者や技術者や、相当なインテリも利用して通勤しているのだから、車窓から山を眺めればどれ程、松喰蟲が跋扈しているか判る筈だが、見て見ないふりをしていなんだらうね。

いま、あるものを大切にして行かないと緑は駄目になってしまう。樹を植えて五年経っても、五年にしかならない。木は生きものなんだからこれが動かし難い天然の摂理なんですよ。〝天然の摂理の破壊をやっているから天然のしっぺい返しがあるのは当然なんだ〟

いまさら、どうしょうにもないんだ。春の陽気の加減でやるような緑化運動や、花いっぱい運動でどうなるものではないが、緑を大切にされるのなれば伝統的な樹々を保護したり、植えて欲しいものだと思うよ。」

御母衣（みほ）の桜を移植する

「先日亡くなられた、高碕達之助氏は屈託のなくて、それできめの細かい人だったし当代の傑物だった。この高碕氏が電源開発総裁として御母衣ダムの開発にあたったときのことなんだが、高碕氏が、標高九〇〇米ぐらいのところに桜の老大木を見つけましてね、これを湖底に埋めるのは惜しいと思われたんだな。この桜の移植が出来ないかと相談を受けまして〝絶対にと言うことは出来ないが仏縁があれば活着することもある〟と言ったら〝是非やって呉れ〟と頼まれましてね。

高碕氏が発見した桜と私がみつけた桜と二本を移植することになってね。42屯と38屯もある二本の桜を動かすために、40日かかって定植したんだが、この移植は空前絶後の難事業だった。思いがけなく二本の桜とも無事に活着して呉れて、私も予想していなかっただけに感動も大きかった。とくに、湖底に先祖伝来の土地を失った村民達が喜びましてね。この桜の記念碑の除幕式のときは、村民が大型バス6台に分乗してやってきて、この桜の老木をなでながら泣いていましたが、この時は純粋な村人たちの気持がいじらしくて貰い泣きしました。

高碕達之助氏も涙を流して喜んでくれましたが、私が高碕さんは偉い人だと思ったのは、あれ程殺伐なダム開発をやりながら、桜の老樹をよくみつけたものだということだ。それも春の花の頃の桜をみつけたのでなくて、11月下旬の葉もない木の頃に発見したのだし、その桜を何とかして残そうと努力しょうとする雅量には頭が下りました私にとってもいい想い出になりましたよ」

■アンコール・ワットの遺跡を訪ねて■

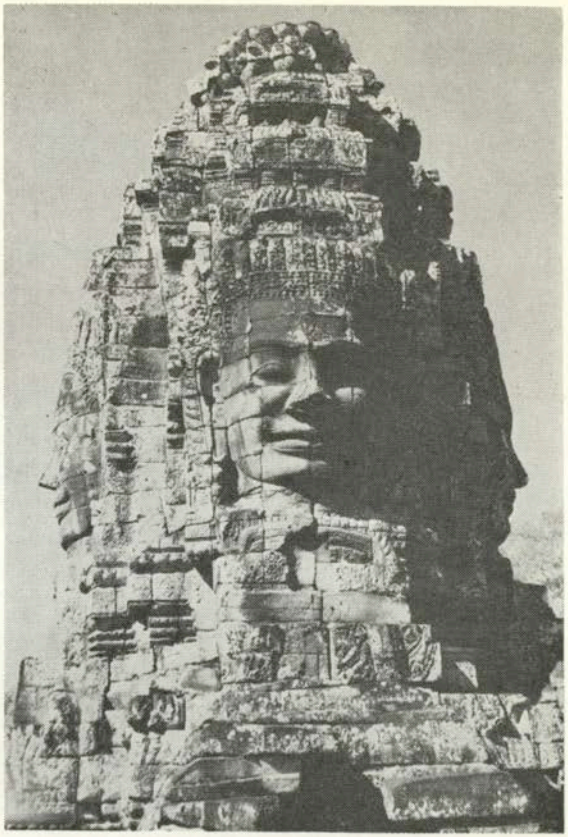
カンボジャへの旅

古田俊子

この二月二十二日、フランスの貨客船ラオス号に乗って神戸港を出帆、2度目の海外旅行に出掛けました。

目指すはカンボジャのアンコール・ワットの遺跡ですが気軽な一人旅です。船は貨客船は駄目だと言う予想を裏切って快適な乗心地でご機嫌でした。私は海外旅行は着物と決めています。着物をきていますと外国では非常に大切にしてくれますし皆さん着物に好意を寄せられます。同じ、一等船客の四、五人の外人老夫婦ともすぐ親しくなりました。船室の調度の洋服タンスにはハンガーがずらりとかけられているので、不思議だなと思っていましたが、その疑問はすぐ消えました。毎晩、船の灯が輝き始める頃になると、船客の老夫婦たちはおやつしをして晩餐を楽しむのです。

音を小さくしたドラが食事を知らせると言うのどかな楽しい船旅でした。——香港ではマカオが大変気にいりました。昔のままの豊かな彩どりの二階建の家屋が絵のように美しく印象的でした。香港から飛行機でカンボジャ、それからプノンペンへ飛び、ここで乗替えて アンコール・ワットへのコースにはいりました。アンコール・ワット《ワットは寺院》は、8世紀〜12世紀にわたって築かれたと言う大遺跡です。14世紀頃、カンボジャがタイの侵略を受けた時、そのまま放棄され約四〇〇年間熱帯の密林に覆われ埋没していたそうで、一八六〇年フランスの探険家ムーオによって発見され、一九〇八年になっ



東南アジア諸国は紀元前後からインド文化の影響を受け、クメール王朝時代の最盛期には外国の文化との交流が盛んに行われている。印度はガンダーラ王朝時代で、このインド芸術や遠くギリシャ芸術の影響も受け、豪華なクメール芸術が誕生したものである。この写真は宗教建築の代表的なものといわれる。アンコールワットにある四面像の石造門の塔の頂上で、この像はジャヤヴァルマン7世が最も崇敬していた観世音菩薩の面像で男体であることも珍らしい。この石造門は象が出入り出来る程の雄大なものである。

て整理され始め、現在も修復中のところがあると言うほどでこの大遺跡の存在は世界の七不思議の一つだと言われているのです。この王城の規模は、四〇平方マイルの豪壮雄大なもので、世界の建築史上の驚異だとされています。先日、日本でも紹介されましたインド古美術とよく似た彫刻、建築が随所で見られますが彫刻は砂岩を利用しているものが多いようです。現在のカンボジャ国の国旗には、このアンコール建築が描かれていて国家の象徴になっています。王城としてのアンコール・ワットがなぜ遺ったか不思議ですけれども、王様の住居は別に木造のものがあったようで焼落ちたらしく、遺跡は宗教的なものだったので遺されたと言われています。アンコール・ワットからバンコックに行き、タイ・ダンスや水上マーケットを面白く見物しましたが果物が豊富で果物好きな私にとっては天国のようでした。タイ料理も案外いただけましたが、やはり香港の支那料理があっさりした味覚で一番美味しいようです。

海外の旅に出ますと不思議に日本と言うものを考えることが出来て来るように思います。私も神戸っ子ですから思いついたことを書いて見ますと、神戸で美しくていいなと感じましたのはポートタワーです。スタイルもいいしイルミネーションが秀逸です。花時計は多分スイスの真似をされたのでしょうが、時計の国スイスにあってこそ花時計は意味が深いので漫然と真似をされるのはどうかと思います。人気はあっても本当に親しめないのはこのためでしょう。武庫離宮が神戸の公園になると言うことが新聞に出ていましたが、フランスのベルサイユ宮殿の庭を模して噴水彫刻などなさるそうですが、恥かしいことです。世界の歴史の中に息づいているベルサイユ宮殿にこそふさわしい庭園なのです。そんな真似ごとではなくて何故、神戸らしい特有の庭園造りを考えてくださらないのでしょう。瀬戸内の美しい海を眺望しながら、日本的なそれでも明るくてスマートな神戸らしさのある庭を創ってほしいと思います。私はやはり画家も彫刻も建築も日本の、神戸の芸術家の創造力で、生きいきとした親しみのもてるものをつくるべきだと思います。

＊ 趣味の手帳

絵を描く楽しさ

秋保仁子

最近はじめたばかりですけれども、絵を描くことがこんなに楽しいとは思いませんでした。

お茶は裏千家、謡曲は観世流の梅若猶義師に草月流の花も稽古はしていますけれども、ある意味で精神修養に通じる厳しさがあります。それでもお茶なれば、心静かに松籟を聴いて茶を喫しますと身も心も爽やかになりますし、謡曲は謡曲の人になってその境界を楽しむことも出来ます。花なれば花一輪を花瓶に活けるとまた違った味わいがそこに生まれ然楽しいと思います。しかし絵筆をとって自然の物を感じたまま描き出す楽しさはたとえようもありません。先生は川崎芳熊氏の奥様で南画なのです。勢よくリズムにのせて描き上げるのです。たよりを差上げるときもちょっと葉書に描きますと大変喜ばれます。

花の春　帽子の春

婦人帽子

マキシン

神戸・トアロード　東京・銀座３－２
ＴＥＬ③6711～３　ＴＥＬ（535）5041

特　選
ハンドバック
専門の店

ジラサ

元町2　③0813